白根町公民館報

編集人　清水節義
発行人　塚田平治
新潟縣中蒲原郡
発行所　白根町公民館
印刷所　白根活版所

図書室の設置
—体育館・図書館建設に通ずる道程として—

丸山銕治

現下の市町村は例外なく財政難に悩んでゐる。それにもかかわらず、やらねばならぬ施策や事業は山積してゐる。住民の負担は忍びうる限度に達して居りその一方なすべき事が多いと云ふ事は非常なる困難なる途である。併し乍ら将来の発展を期するならば文化施設の充実こそ重要なる施策の一つでもあり、図書館・体育館・演藝館を綜合した処の文化会館の建設こそ私共の世代に実現して子孫に残したい施策の一つでもある。それはそれとして私は今、その一つ図書館・否「館」程でなく、ささやかな図書室の設置充実を考へたい。

現在個人の健康が社会的に保障される如く、私共の教養も社会が之を保障して呉れる時代が来てゐるのである。此處に私が要望するのは公共的読書施設の充実である。

住民が「学びたい時」「読みたい時」「ゆつたりと心身を休めたい時」いつでも行つて自由に読書し得る憩の施設、教養施設の充実こそ急務であり、それへの努力が社会教育行政の根幹であらうと思はれる。幸ひにして当公民館に於ては本年度二万円の予算を計上して図書室計画の推進に乗りださんとして居り、その実現が期待せられる。

私共が子供の頃は今の高校の教務室が町立図書館の閲覧室であり、その後現在小学校の教室になつてゐる一部の建物がそうであつたが、その当時の蔵書や備品などはどうなつた事か？恐らく戦争末期から終戦後のあの混乱時に紛失したものでなからうか？

とにかく従来やゝもすると大衆から切離された存在になりがちの図書館と云ふものも今後は公衆の唯一の文化源泉として開放されなければならないのであつて、育成途上にある公民館運動の一環として社会教育面の重要なる部面を担当することとならう。さらに今後の図書室(館)は単なる図書の集積場としての役割から、社会生活への直接的な働きかけとしての意味をもつ動的なものでなければならない。

例へ図書館法適用の基準に遠く及ばなくとも、そのあり方はやはり同法細則にもある如く、レクリエーションと、インフォルメーションが大きく取り上げられて来なくてはならない。そしてサービスセンターとして性格づけられて行くだらう。

先程行はれたアンケートの資料をまつまでもなく、その歴例的要望である図書室計画は、余住民の協力と殊に有識者の格別なる理解によつて一日も早く実現致したいと希求する一人である。再び云ふ私は公民館図書室の設置は決して不可能の問題ではないと思ふ、必ず打開の途のあることを確信する。そして始めから蔵書の多大を望まない、蔵書は年々増加して行くものであり、県立図書館の貸出文庫を利用することによつてもある程度閲覧者の要求を満たし得るであらう。

因みに縣下及び郡下各地の図書室の実情を記して筆をおく。

○公民館の図書購入費拾万円以上の町村
中條　小須戸　五泉　亀田
吉田　黒埼　燕　小千谷
直江津　村上　両津

○公民館の図書冊数三千以上の町村
黒川　小須戸　見附　[illegible]
新井　大和川　金津　新穂
畑野

○中蒲原郡公民館の図書購入数と一町村平均蔵書数
購入数　三一、七六四冊
蔵書数　三九九冊

菌核病撲滅對策成る！
三億圓のムダ

白根郷農業改良普及員
主任技師　飯岡藤七

白根郷に於ける稲作上最も脅威とする菌核病の発生は、今より約二十五年前に始まり、其後年々増大し最近白根郷十ヶ町村六千余町歩に亘り被害を見るに及び、昨年の如きは三億円の大減収を示すに至つて居ります。この様な障害を一刻も早く究明する事が先決であるが、徹底的な防除対策は農業試験場の科学的試験機関に依る打開以外に途がないのであつて、昨年十月十日白根地區農業改良普及事務所で之れが対策を取り上げ、郷内町村長、農協長、共済長、農業改良委員を一丸とした白根郷菌核病対策委員会を組織し、試験機関誘致のため本省は勿論縣当局、縣議に対し幾度となく陳情請願し、幸い其の努力は報いられ、中心地白根町に試験地設置の運びに至り今年度より縣農業技術陣の科学的メスが振はれる事になつたのであります。此の間白根町の皆様の多大なる御支援と対策委員長塚田平治氏、副委員長非平松氏の献身的努力に負ふ処極めて大きく、将来本郷の農業改良上稗益する点大きいのであります。本試験は全國に類例少く本省に於ても大きく期待され穀倉新潟縣の農業研究機関としては勿論のこと将来農林省の験験地として成長し発展する事を祈つてやまないものであります。今後一層皆様の御支援を御願い致します。

縣營白根試験地の事業内容

一、設置場所　白根町裝口
二、試験地事務所　建物三棟
三、試験地圃場　一町歩
四、農夫　常農夫三名
五、場員　縣農業試験場より時折出張し試験の任に當る。
六、試験内容

(イ)水稲耐病性検定試験　五畝歩
縣内優良十七品種を取り入れ栽培し、菌核病に対する対病性を品種毎に化学的に調査し本地帯に於ける適否を検定するものにして本試験に期待する処極めて大きい。

(ロ)水稲品種比較試験　一反歩
全國的代表品種を約百種取り入れ乾田化した本地帯に於ける最も増収向き品種を見い出さんとするものにして耐病性検定試験に次ぎ期待する処極めて大きい。多年本郷に適した湿田向代表品種農林一号、農林二十一号は数千町歩に亘る乾田化と共に今や姿を消さんとする状態に直面し、農家経済に影響する処極めて大きい。一刻も早く乾田地帯の適品種選定を急がねばならぬ此際本試験は意義深きものがある。

(ハ)水稲肥料試験　一反歩
肥料三要素が収穫に極めて大きな影響あるは論を待たざる處にして肥料の各要素と菌核病の発生並に収穫関係が本地帯に於て如何なる結果を表はすか科学的に究明せんとする試験である。乾土効果甚だしき乾田地帯に於て（加いて本郷は稲の結実前に根腐現象を呈する地帯が極めて多い）窒素肥料の増施は無効分蘖を大ならしめ、稲が軟弱徒長し結実不充分となるは勿論、障害の誘因となり分蘖の割合に穂減が特徴である。之れを根的に究明して行かねばならない。

(ニ)水稲病理試験　一反歩
土壌を薬剤をもつて技術的に處理し、其結果稲の生育並に菌核病の発生関係を知らんとするにある。此の試験を分けると

(1)フオルマリン處理區
フオルマリンで土壌消毒し試験する方法である。

(2)ウスプルン處理區
ウスプルンで土壌消毒をなし試験する方法である。

(3)焼土処理區
土壌の表面を焼き試験する方法である。

(4)堆肥処理區
堆肥を増施し試験する方法である。

(ホ)水稲栽培法試験　六反五畝
乾田地帯に於ては湿田地帯と異なり年に依り豊凶の差甚だしく技術の改善を必要とし、最も適当した栽培法を見い出さんがためである。此の試験を分けると

(1)水稲晩植栽培區　一反歩
水田裏作関係を考慮し晩植が菌核病発生と如何なる関係にあるかが究明すんとするにある。

(2)普通栽培區　五反五畝
合理的普通栽培をなし其れが菌核病発生と収量に如何なる結果をもたらすか試験するにある。

以上の様な設備と内容に依り四月一日から事業を始めたのであるが漸次之れが対策に光明を見い出す事になると思ふが絶対的対策は一朝一夕にして出来上るもので無く今から皆さんの御理解と御協力を御願いして農試白根試験地の紹介とします。

白根町略史（三）

伊丹末雄

元禄十二年（一六九九年）町勢調査が行われたが、その結果は戸数二百二十一、町の長さ五百三十五間、巾五間であつた。この時の地図が傳わつている。元禄年間田村氏が十五間を開発した。

元文二年（一七三七年）五月中ノ口川の改修工事が完成したが、その祝いに里正三代袖山忠兵衛が領主溝口侯から拝領した凧をあげたところ西白根に落ちそれが今日世に名高い白根の大凧合戦の起源となつたという説がある。凧合戦の始まりについては、また同じ頃東白根の四郎兵衛と西白根の又右衛門という農家の子どもがあげていた凧が川の上でからみそれが両地藩が争うことも大きな原因となつて合戦にまでなつて行つたといい更に一説には西白根の袖山又右衛門の下女が米櫃を川で洗つていたところへ東白根の四郎兵衛の子どもの凧が引かゝつた。それが合戦の起源になつたのだという。私は到底三説中のどれが正しいかを判断することができないが、ただ思うのは三條や今町などの凧合戦と白根の凧合戦との間には関係が別にないのであろうかどうかということである。いゝにくいことながらもし白根の凧合戦がこれらの土地の合戦よりも遅く始まつたものであるならば模倣ということも考へられるのではなかろうか。白根が越後中で一番古い傳統をもつのであるならばもちろん愉快極ることである。どなたか調べて下されば幸いである。

寛暦元年（一七五一年）藩主溝口直温は当地を巡視して袖山家に一泊し、白根神社に金絵馬を奉納したという。

同十三年（一七六三年）戸田文明という当町の俳人が「蛙袋」と題する俳書を出版した。（以下俳句関係のことはすべて越後俳史研究の権威木村秋雨氏と白根の俳人木村平一郎氏の御好意によつて知りえたものである。木村秋雨氏は昨年七月の某日私を訪うて下さつたが、不幾にも他の問題について語り続けて、この地の俳史をただすことを忘れたいめに今詳しく書けないことを遺憾とする。）

明和二年（一七六五年）川崎三太左衛門が佐々木村（北蒲原郡）から来て鯵潟をます〳〵開発した。

この年中ノ口川が大水になつた時小さな堂が流れて来て岸の柳に引つかゝつていたのを船頭が見つけて里正袖山忠兵衛に届け出たが、その堂の中には金比羅神が祀られていたので、忠兵衛が自分の庭内に一堂を建て、安置した。これが後に金比羅神社になつたといわれる。

忠兵衛はまた伏見から稲荷神を受けて来て庭内に祀つたが、これが明治に至つて白根神社の境内に移されたという。

この頃打越の澤家から入婿した四代袖山忠兵衛が妾の父細山利七に「おまち屋」という青楼を営ませた。ところが藩主が、このことを怒つたので、四代忠兵衛はもとより義父三代忠兵衛も當地にいることができなくなり、下田に移つて紺屋を営んだ。四代忠兵衛は後に桑名へ行つて士分になつたという。後任の里正として鵜田村から西方五右衛門が移つて来た。この時袖山家と共に缺所となつたものは四十戸にのぼつたが、能登の開祖小山興助、七軒の名主長井左五衛門もその中に入つている。妾の父細山利七は六部となつて流浪し、妾は明和七年（一七七〇年）に死んだ。横町の地蔵はこれを祀るのだという。

その後十年して罪は消え、年老いた三代忠兵衛はなつかしい白根へもどつて来た。溝口侯は彼の実子貴兵衛を名主にしようとしたが、固辞して受けず、中ノ口を航行する船の集まる船江町にいて一文ずつ上まえをはねる帳もちの頭となつた。その後も名主西方五右衛門が五十公野郷の大保長に転任し、小須戸から吉岡新五衛門が赴任し、その子名藤吾・孫名太郎が名主職をついたが、名主の代のかわる度に藩主は貴兵衛に命じたが彼は遂に受けなかつたのである。もつとも名主の中には貴兵衛の就任を妨害した者もあつたが。

三代忠兵衛は天明三年（一七八三年）十一月九十三歳の高齢を以て没した。稀に見る人格者であつたが、下田にいた時「甲がえ絞り」と呼ばれる新しい木綿の絞り方を考案している。

明和八年（一七七一年）白根が生んだ儒者木下素洲（通称杢助）が江戸から帰つて子弟を教えた。素洲は細井平洲の門人で、未刊の著書に「詩経講録」八巻がある。（木下家所蔵）天明六年（一七八六年）没した。

安永三年、

防

山崎仙庵は高田の典医であつたが上杉侯会津転封の頃移つて来た。最も栄えたのは天明年間で、今の仙庵小路の南側一帯はすべて山崎家の跡である。現在の本田医院の場所に公園をつくり、櫻などを植えて町民を喜ばせた。仙庵小路と櫻町の地名はこゝから出ているわけである。山崎家は明治十五年に至つて絶え、十三年「いづきん」という料理屋になつてしまつた。

寛政元年（一七八六年）十月ウマの日の午後、櫻町の大工の妻おみきが火をあましたために金町が燃え、対岸の村上領の高札を焼き、五ノ上まで延焼した。村上藩は新発田藩に以後十二丈以上の家屋は建てさせぬように厳重に申し入れ、このことが明治まで守られたという。この大火を「おみき火事」と呼んでいるのである。

すでにちよつと記したように寛政五年（一七九三年）白根保長西方五右衛門は五十公野郷の大保長に栄転し、吉岡新五左衛門が後任となつた。

享和元年（一八〇一年）新津に住んでいた當町出身の儒者大武東開が死んだ。「学海涌鏡」五巻をはじめ他に八種十一巻の著述がある。

文化元年（一八〇四年）禁居という俳人が「蟬丸」と題する俳書を上梓した。

天保七年（一八三六年）には大洪水があり、恵光寺境内でおよそ三尺の水があつたという。（「恵光寺文書」）天保九年（一八三八年）に死んだ医者保倉玄朝は薬を売り、「保倉神方」の名は文政年間から遠近に高かつた。彼は「二世安楽教訓集（おきてくどき）」なるものをつくつて民衆を啓蒙したという。

安政五年（一八五八年）今町の司箔（姓不明）が編み、當時下越俳壇の重鎮であつた水原の靍見庵乙良が序文を書いた「自國人名録」中に白根の俳人として加藤安雅・加藤滿風・鈴木緑陰・真島路村の四氏が記されて一句ずつ作品が掲げられている。別にすぐれた句はないが、中では路村の

餘つけば火風のおこる落葉哉

がよいのではないかと思われる。

（今回は二泊三日の修学旅行から歸